

# 副市長就任3年目。危機管理に尽力

地震、台風と続き、被災  
 家屋や市民へのすばやく  
 適切な対応がされるかど  
 うかが問われた。弊紙調  
 査でも各自治体によって  
 差があることが分った。

に単身赴  
 任。南海  
 トラフ巨  
 大地震を  
 想定した  
 アクシヨ



中村誠仁副市長



危機管理室で、刻々と現場の状況を把握し 指示

守口市の副市長・中村  
 誠仁氏（61）は、大阪府庁  
 に在職37年。最後の危機  
 管理監の役目を全うして  
 から、定年1年前の  
 2016年、市の要請を受  
 けて副市長に着任した。  
 太田知事下での財政危機  
 プロジェクト長、橋下知  
 事の際には関西空港戦略  
 室長などジェットコース  
 ターのごとく重要任務を  
 次々歴任してきた。なか  
 でも、危機管理監の2年  
 間は、非常時の補佐官と  
 して、大手前の民間庁舎

ンプランのとおりまめ  
 や、府の防災センターへ  
 行き、知事とのホットラ  
 インの携帯を肌身離さず  
 持ち、常に緊張状態で任  
 事に当たっていた。「身を徹  
 して府民の安全を守  
 る」。公務員の原点であ  
 るとの気概で、仕事に従  
 事。それは、厚生省（現在  
 の厚生労働省）に出向し  
 た30歳半ばの時の上司の  
 影響だった。東京で、阪神  
 淡路大震災勃発の報を受  
 け、厚生省から、兵庫県へ  
 支援物資を送り続けてい

たが、「予算がない」と  
 の部下からの報告に、  
 「予算なんてどうにでも  
 なる。現地に送り続け  
 る。国民が苦しんでいる  
 こんな国難の時にできな  
 くて何が国家公務員だ」  
 と、普段は温厚な人が語  
 気を荒げた。この時、公  
 の道に進んだ自分を覚醒  
 させられた。

どんな状況にあっても  
 民のために尽くす。危機  
 管理の司令塔でもある中  
 村副市長の公務員魂は市  
 職員に伝わりつつある。